

## 第2回研究集会 内容報告

「バレーボールの発展に向けて - スポーツ行政の立場からの提言 - 」

講師：橋爪静夫（なみはやドーム館長・大阪教育委員会副理事）

---

### 1. バレーボールの普及に関する課題

#### (1) 学校体育指導者への期待

少子化、それに伴う若年の先生の減少が現実の問題として存在するが、学校現場に対する期待は少なくない。

#### A. 教科体育

「学校体育のねらい」は生涯スポーツへのつなぎ、準備、基礎づくりである。現実の学校体育ではこの目標が達成されていない。その理由はスポーツを人格形成（教育・人間形成）のための教材として扱っていることにあると思われる。スポーツ自体を楽しめるような方針に変えていかなければ、「学校体育のねらい」は実現できない。

また、指導手順が技術系統のつみあげに重点がおかれているのも、問題がある。例えばバレーボールなどの球技では集団スポーツとしての特性にもっと早い時期から触れさせなければならない。

#### イ. 部活動

部活動に関して、親の期待は高いが、競技型、生涯スポーツ型と混在しており、子供たちのニーズに対応できない状況が生まれている。生涯スポーツ型の

部活動は学校に残すことが重要だと考えるが、競技型の部活動は学校とは別ルートを一掃に整備しなければならない。学校には期待しない(ことが大切である)。

「子供にバレーボールをあわせる努力」が重要であるが、逆に競技力のある者が恥じ出されることになる。そのための受け皿が必要である。

教科体育で人格形成の教材として使われているように、学校や指導者の名誉だとかモラルの面にとらえられているのも問題である。

## (2) 小学校における教材化

学習指導要領に教材として取り上げられるように、協会を筆頭に相当のテコ入れを行っている。実際には種目としてミニソフトバレー(4人制・ゴムボール)を採用していきたい。

2003年の完全週休2日制という流れの中で、教育内容の厳選が問題視されており、新しい種目を入れていくのは大変難しい。おそらく、選択制として導入されるであろう。実際にはバレーを理解した先生をどれだけおけるかであろう。

## (3) 日本バレーボール協会の普及関連事業の効率化

現在、JVAでは20事業を行っている。そのほとんどが行事消化型になってしまっているのは問題である。また、JVAは行政の力を借りるのが上手くなく、JVAの傘の中でやっている印象を受ける。行政の窓口は「教育委員会」であるが、

もっと連携した方法を模索すべきである。

## 2. バレーボールの国際競技力向上に関する課題

### (1) 強化の一貫性

水泳のように、強化の一貫性を整備することが重要である。上記の「部活動」の話ともつながるが、競技力のある選手を学校単位にこだわらずに育成していかなければならない。

### (2) ヤング・ジェネレーション・バレーボールクラブ連盟（仮称）の創設・大会の開催

学校の枠を越えたクラブを抱え込む組織をつくっていかなければならない。  
例えばサッカーの U-15、U-20 のように年齢制限の大会である。

また、参考資料として総理府「体力・スポーツに関する調査」が提示され、1979 年と 1994 年との比較では「運動・スポーツ実施状況」は若干の上下はあるが、トータルではあまり変化がない(67.9%が 66.7%) のに対して、「競技的スポーツ全種目」では 31.5%が 17.5%へと半分になり、「バレーボール」は 9.6%が 3.5%と約 3 分の一となっていることが報告された。

世論のスポーツに対する興味がレジャー的な要素の強いものに傾いているという印象を受けた。

報告者（文責）：後藤浩史

---

第2回研究集会 内容報告

「ジャーナリストが見るバレーボールの今後 - マスメディアとバレーボール - 」

講師：後藤正史（産経新聞大阪運動部バレーボール担当）

-----

(1) マスメディア（新聞やテレビなど）の役割

・情報の送り手（取材者）と受け手（読者、視聴者）=たとえば、テレビの「

アタック No1」と大林素子さん（元東洋紡）

この例に見られるようにテレビの影響は非常に大きいものがある。

・ビーチバレーに転向した元ユニチカの佐伯美香さんとワールドカップ

みなさんご存じの佐伯人気も必ずしも自然発生ではなかった。ワールドカップを盛り上げるためにも、切り口としてスター選手の出現が必要だった。男子では中垣内であり、女子では佐伯であった。

中垣内は大会前からのスター選手であったが、佐伯はその活躍や容姿も手伝って、予想以上の人気者となり、それまで閑古鳥が鳴いていたユニチカの練習見学も相当数の人が訪れるようになった。

V6とのタイアップ企画や、一部に不評な絶叫アナウンサーも賛否両論はあると思うが、結果的にワールドカップは視聴率20%（実質、TVを見ていた人のなかでは40%）という高視聴率を得て、入場者数を含めて、予想以上の売り上げ

をあげた。

結果的には第2回Vリーグの人気にも影響を与えたと考えている。逆に第3回Vリーグでは人気が低迷したと感じている。

・ジャーナリズムに携わる者の本質

(2)新聞記事を「広告」に換算すれば何百万円か何千万円？

写真入りの新聞記事を広告と考えれば、上記のように数百万円単位の費用が必要となる。これらの記事は頼めば、広告料を取られるわけだから、いかに新聞等のメディアを利用できるかが大切なんだと思う。

・企業や警察、役所の広報担当者と新聞記者

警察などは、これらの記事（ニュース）の出し方が上手であり、警察という企業のイメージアップを上手に行っているように感じる。それに対してJVAはメディアの使い方が下手だと感じる。

過去には男子でも女子でもマスメディアの使い方が上手な人が存在したというのも事実である。

・ニュースの判断基準 = 「5W1H（いつ=WHEN、どこで=WHERE、だれが=WHO、

なにを=WHAT、なぜ=WHY、どうしたのか=HOW)」

新聞記者の立場でいえば、これらのニュース記事はそれを求める読者層を想定してのものになるわけであるが、ニュースバリューが高ければ、積極的に載せていくものである。もちろん、人気が高ければ、関西のタイガース記事のように負けても1面なんてことがあるように、勝てばというだけでなく、読者とのかねあいもあるし、逆に記録がかかっているというようなそのニュース自体の価値も関係する。

ワールドリーグなどでは観客が8,000人、報道が4,5人なんて現象さえ起きている。

(3)新聞ができるまで(記者席から、家庭へ)

・主観(記者の個性)と客観報道

記事の客観性というのはつきつめれば、事実関係だけになるのかもしれない。どの記事を取りあげ、どのくらいの取り上げ方をするのかなど、限りなく客観に近い主観が絶えず入るものでもある。

・記事のレイアウト(紙面のかたち)

最近ではバレーの試合が新米記者の練習の場となっているケースもよく見られる。記事としての扱いが小さいために、大きなスペースを任せられないような新米記者の担当になってしまっているのである。

こういう状況を打破するためにはナショナルチームが強くならなければ、やは

りだめだと思う。確かにサッカーとかバスケットとか世界レベルで低いスポーツの盛り上がりもあるにはあるがやはり、オリンピックやワールドカップで活躍してくれると、扱いは大きくできる。

(バスケットでも実際に人気があるのはNBAであり、決して国内の実業団で視聴率を稼げるわけではない)

報告者(文責): 後藤浩史

---

第2回研究集会 内容報告  
「研究動向に見るバレーボールの今後」

講師: 島崎 司(大阪教育大学教育学部教育学研究学科)

---

以下、抄録です。

---

バレーボールの競技レベルがたとえどのようなものであったとしても、チームに携わる指導者達は、チームおよび個人のパフォーマンスを向上させることに力を注いでいる。そして、彼らが高い問題意識を持ってバレーボールの指導に当たっていることは言うまでもない。

近年のスポーツ科学の発展にともなって、バレーボール研究にも様々な科学的手法が取り入れられるようになってきた。けれども、その研究は盛んに行われている

とはいいがたい。また、研究から得られた知見は、指導者や選手にとって魅力的なものではないようである。では何故、バレーボール研究から得られた知見が、現場の指導者や選手に見向きもされないようなものになっているのだろうか、果たして研究者達は、指導者および、チームや選手が抱える様々な問題を解消するためのヒントを提出しているのだろうか。

このような疑問から、今回は過去5年間に発表されたバレーボール研究を概観した。そして、バレーボール研究の問題点を研究者の視点で明らかにすることで、今後の研究の課題として議論したい。

研究が明らかにしてきたこと

現場の問題意識とは

研究者の取り組み

バレーボール研究に求められるもの

ディスカッション

---

ここまで

過去5年間のバレーボールに関する研究の内訳は、スキル(36%)、ゲーム分析(32%)、チームの実態(17%)、事例報告(7%)、問題提起(3%)、その他であった。

その中で、筆者らが指導者のヒントとなりうる(問題意識が高い)研究と判断

できる研究は全体の 55%程度だった。

データ収集法から見た場合、ゲームによるものが 47%、動作分析が 26%であった。特にデータがとりにやすいゲーム分析による研究が多いこと、また、研究対象が一流選手であることが多く、筋力面での発達を考えれば、中高生の研究がもっとなされるべきであろう。

また、スキル(36%25 本)の研究の内訳はサーブ(6% 4 本)、レシーブ(12% 8 本)、スパイク(14%10 本)、ブロック(4% 3 本)であった。ブロックの研究などはもっと着目すべきではないだろうか。

研究全体を通じて、感じることは「ある局面だけを切り取ってされている」ことである。「統合的・学際的な研究がなされなければならない」

報告者(文責): 後藤浩史

---

第 2 回研究集会 内容報告  
「バレーボールの今後」

講師: 田中幹保(新日鐵ブレイザーズ総監督)

---

以下、抄録を中心に、メモを元に一部加筆しました。

---

男子バレーボールは、1972年ミュンヘンオリンピックで世界の頂点に立って

以降衰退の一途をたどってきた。その間、幾度となく「新しい強化体制を」と叫ばれてきながら20数年大きな変革もなく今日に至っている。今日は、実業団チームの立場から、現在、日本バレー協会が抱えている課題等について述べていきたい。

#### <現状と問題点>

##### 1. 企業スポーツの存在意義

高度成長期、各企業は社員の士気高揚・一体感の構築また、地域との融和等を図るため競って運動部を持つようになった。その後、バブル景気の崩壊もあり、運動部の廃部が相次いだ。そして、社内での位置づけも福利厚生から広報活動に変わってきた。

#福利厚生ととらえられていたときには、勝ち負けよりも、頑張っていることが重要であった部分も少なからずあったと思われるが、位置づけが広報活動に変わったことで「勝たなければいけない」状態になってきている。

##### 2. 学校教育の中での育成の行き詰まり

諸外国もうらやむほどの小・中・高・大学の全国大会。その中から多くの優秀選手を排出してきたが、最近はマイナスが目立つようになってきた。

先生方は自分が担当する期間内に良い結果を出そうとするあまり、選手を小粒に育てる傾向が目立ち、世界に通用する選手育成ができていない。また、指導者の

減少も育成の行き詰まりに拍車をかける結果となっている。

#春高バレーといういわば新人戦がメイン（テレビ中継の関係でも）となっているのも大きな要素であろう。

### 3. スカウトに勢力を傾注する体制

優秀選手を獲得することがチーム強化に欠かせない要因であることは誰もが認めることであるが、スカウト活動に精力を傾注するあまり、諸外国に比べても監督としての能力が低いように思う。

紐付き採用、または契約金を出す企業も多くなってきた。そういった金を多く出す企業に選手が集まり飼育の状況も目立つ。

ただ、多くの先生とコミュニケーションを図ることによって、いろんな情報を入手できることはプラス要因である。

#朝から晩までバレーのことを考えているアメリカの先生はプロであり、監督としてのレベルも高い。

#4. 選手の気質、取り組み方が変わってきている。今の選手は能力の評価をして欲しいというか、他人の評価を気にする。

<今後の課題>

#### 1. 優秀選手の発掘と育成

バレーがマイナーなスポーツとなり、学校のチーム数部員数も減少の一途をたどっている中、優秀選手の発掘、そして一環指導体制（世界に通用する選手の育成）の元での育成が必要であろう。

---

ここまで

上記の抄録関連以外に、イタリアでのバレーボールを見てきた感想として、イタリアのプロバレーは見ていて面白し、魅力あるバレーであった。これはそこに出ている選手が世界選抜のようなレベルの高さであったため（選手自体が）と言及されてました。

日本のVリーグも第1回、第2回と一部の外人選手でやっていたときには、それなりのレベルの向上も見られ、ベンチにいてもバレー自体が面白くなったと感じていたが、第3回あたりから、逆に外人選手が非常に目立つようになり、バレー自体のおもしろさが低下しているようにも感じると言及されていました。

報告者（文責）：後藤浩史